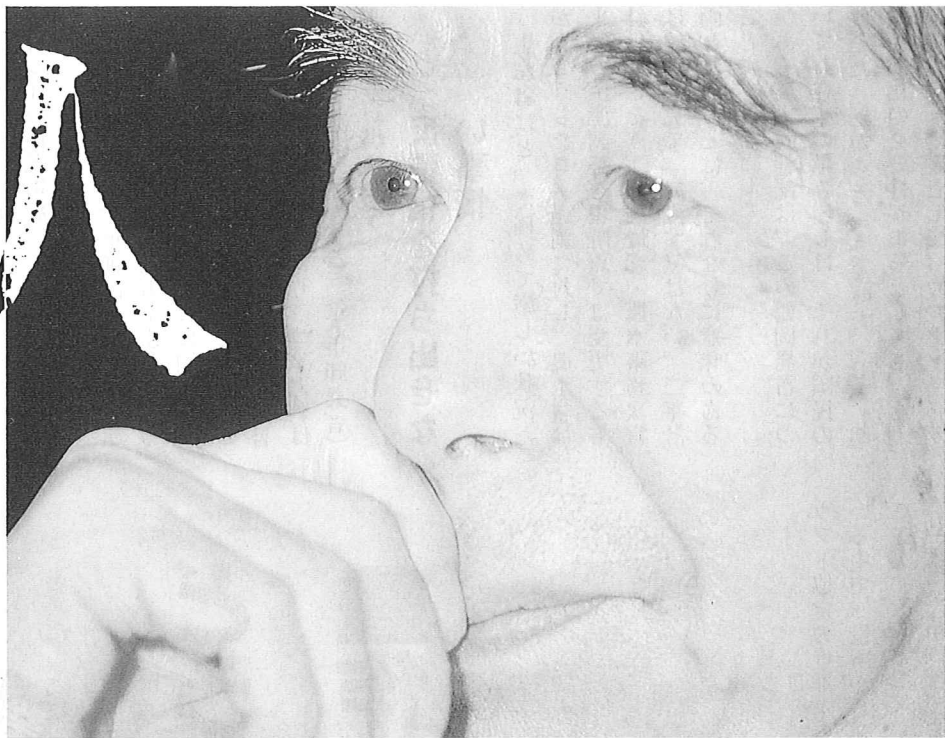




武田邦太郎氏

(参議院議員・武田新農政研究所所長)

「殿」「操り人形」「豹変する」あるいは「未明の記者発表」などと揶揄されて、最後は金銭スキャンダルで政権の座を追われた細川護熙氏と日本新党であるが、細川政権はそれまでの政権が問題解決を先送りすることで政治的責任を回避してきた懸案事項を案外あっさりと通して

しまった。そしていわゆる五五年体制といわれる政治の構造と戦後日本人の精神風土に何らかの風穴を開けたことは間違いない。
その日本新党が花々しく発足して、参議院議員選挙の比例代表区の名簿に武田邦太郎氏の名前を見たとき「なぜ武田氏

が政治家に？」というのが僕の正直な感想だった。そして、大衆的には無名でも、改革派農水省官僚や政治家の間に評価の高かった武田氏を新党発足に当たって起用した細川氏を「ヤルナー」と思ったものだった。それでも、いかにも政治家ではない武田氏が、なぜと思ってきた。

武田氏は、昭和一〇年に東京帝国大学文学部を卒業、鐘紡農林部に入社、中国での大農場建設・経営に参加し、戦後は同社を退社し山形県島海山麓の西山開拓地に入植、開拓農協長になる。その後、池田内閣時代以来、その希有の実践経験と政治哲学を見込まれ、乞われて自民党の農政顧問的役割を果たしてきた在野の農政学者である。そして昭和三五年以来、第二次・三次産業と伍して国際競争力を持ち得る高生産性農業実現を信じる農業経営者自身による研究組織「武田新農政研究会」を主催し、農業者自身による現状認識と、農業の技術革新や農業経営者の能力が発揮できる農業生産基盤の確立に向けての地域活動を発展させるべく啓蒙活動が続けてきた人である。

そんな武田氏について、平成五年七月発行の「新農政」誌（武田新農政研究所機関誌）にある武田氏の論文「この国、国にあらず」を読んで、その政界出馬への心情が知れたような気がした。

どこまで行っても主体性なく模様眺めを決め込み、既得利権の保全にきゅうきゆうとする当時の政界、官僚、団体、関連業界の状況にシビレを切らし、失礼ながら労骨に鞭打った武田氏の行動であったのだろう。

武田氏の論文は、氏が農政研究に足を踏み入れた昭和七年ころに読んだ中国の

古書に次のような言葉があることを知り感銘を受けたという文章で始まっている。

「九年の貯えなきを不足といい、六年の貯えなきを飢えるといい、三年の貯えなきをその国、国にあらずという」と。

そして、国土経営の水準が低く、生産性も乏しかった古代に、これほどまでに自らに戒めた名君がありえたと書いて、武田氏の年来の所論を展開している。

武田氏は、すでに経営者は育っている。遅れているのは、政治、制度、行政、農協であるという。そうした経営者たちの能力が発揮されるような条件の整備、すなわち農業生産基盤の確立と、そのため国土計画が急務であるとする。それがまた、福祉的農業の未来を保証することにもなるのだという。そして同時に、経営者群も現在までの「社会主義的農政」は批判はしても農業の将来の可能性についてさらに理解を深めていく必要があると話す。

曲がりなりにも、農政は新しい展開をみせた。それは七〇年にも及ぶ武田氏の農政研究が部分的にでも実現されてきているのかもしれない。

一徹な実践派農政学者を慕う革新的農民は多い。恒例になっている「新農政研究集会」は、来年夏は青森県田舎館村で開催されるという。また同研究会発行の機関誌「新農政」は未来を思考する経営者たちにとって示唆に富む資料だとおもう。一読をお勧めする。（昆）

武田新農政研究会の連絡先は、〒100
2東京都千代田区九段北四―三二二〇
九段フラワーホーム八F
☎〇三―三二四三―二九二八。